

カズオ・イングロの不穏さに惹かれて

古川日出男

(作家)

聞き手=長瀬海(書評家)

作家・古川日出男はカズオ・イングロが描く世界を「不穏」であると語った。その根源にあるものとはいったい何なのか。「記憶」と「孤児」を手がかりに、自身の創作に対する思いとともに語ってくれた。

と同じようなものがあると知り、いくつか探して読んでみました。そしてサルマン・ラッシュデイの『真夜中の子供たち』を手にするようになるわけです。

これがものすごく、僕はぶっ飛んだ。この作品は一九八一年にブッカー賞を取ったんですが、その後、ブッカー賞の二五周年を記念して一九九三年に開催された、二五年間のブッカー賞受賞作のなかでのベストを決める「ブッカー・オブ・ブッカーズ」も受賞したんですね。それで、どうやらブッカー賞というのは信用できるらしいぞ、と思い、一九八九年にブッカー賞を受賞したカズオ・イングロの『日の名残り』を読んできました。

——マジックリアリズムからブッカー賞を経由してイングロに出会ったんですね。ただ、ラッシュデイとイングロの作風は大きく違います。三〇年ほど前、『日の名残り』を読んだときに古川さんが惹きつけられた部分とは一体なんだったんでしょうか。古川 これはその後のイングロの作品でも一貫していることなんですけど、世界が不穏なんです。居心地の悪さ、のようなものがあるんですね。クツシヨンの下に何かが置いてあって、それに気づきながらもずっと座っているような。たとえば、『日の名残り』を読んでいると、主

——古川さんは過去に文庫版『わたしたちが孤児だったころ』の解説や『わたしを離さないで』の帯文などを書かれていて、古くからカズオ・イングロの作品に親しまれてきたことだと思います。古川さんがカズオ・イングロの物語と出会ったのはいつ、何がきっかけだったのでしょうか？

で一番衝撃を受けたのがラテンアメリカ文学でした。ラテンアメリカ文学の一つの潮流であり、とりわけ僕の好きなガルシア・マルケスが確立したマジックリアリズム——いま振り返るとマルケスの一部の作品にしか見られない技法ではありませんが——に魅了されていたんです。それから、南米の文学に限らず、移民が書いたイギリスの文学、あるいはカリブ海の文学にもそれ

人公のステイブンスにうつすら嫌悪感を抱く。純イギリス文化の住人の話で、これは自分には全く関係のない世界だな、というふうにも最初のうちは感じる。でも、不思議なことに最後には共感している自分がいるわけです。イングロが描く、人の弱さや社会の欺瞞(きまん)というのは普遍的なもので、読み手であるこちらにも跳ね返ってくる。何より彼は、そういう弱さを抱えた存在を全く馬鹿にせず、ささやかな敬意を払って一冊の本の語り手に起用している。そして、そんな語り手が嘘をついていないのに、嘘をついているような、そんな心を揺さぶるような感覚を醸している。間違っているのは読んでいるこつちなのかもしれないと思わせるような感覚といえますか。それで、イングロが素晴らしい作家であることに気づかされたわけです。

——つまり、古川さんが感じた居心地の悪さというのは、世界の欺瞞(きまん)を内側から考えるイングロに特有の小説的思考法から生まれているものだったんですね。

古川 そうですね。特に『日の名残り』の場合、背景に第二次世界大戦があることも重要です。あの戦争については、日本人からしたら自分たちは敗戦国で世界に対する加害者なわけだけど、イギリスはある意味で被害者であり、絶対的な

正義の側にいるという意識がある。自分たちのおかげで世界は秩序を保っているんだ、というような正しさの価値観ですね。ただ、そうした倫理はアメリカとソ連によって世界が二分され、イギリスが超大国から陥落すると崩れてしまう。そのとき、自分たちの正しさは絶対的なものじゃなかったのかもしれないという疑いが育ち始める。そうした時代背景のなかでイングロはああいう主人公を設定した。僕はそこを信用したんだと思います。

孤児はなぜ邪悪な世界で生きるのか

——古川さんが『わたしたちが孤児だったころ』に寄せた解説は、『文庫解説名選』のような企画があると必ず名前があがるほど名高いものです。あの解説のなかで古川さんは「孤児にとつてこの世界は最初から邪悪」だったと書かれていました。この「邪悪さ」というのは先ほど語られた世界の不穏さに繋がるものだと思うのですが、その正体は一体なんなのでしょう？

古川 倫理や哲学的な問いを抜きに考えれば、「邪悪さ」というのは、その世界にいる「私」を生き延びさせない力だと考えることができます。孤児は、最初から自分を守ってくれるはずのもの



YES